「貝塚博物館」の開館

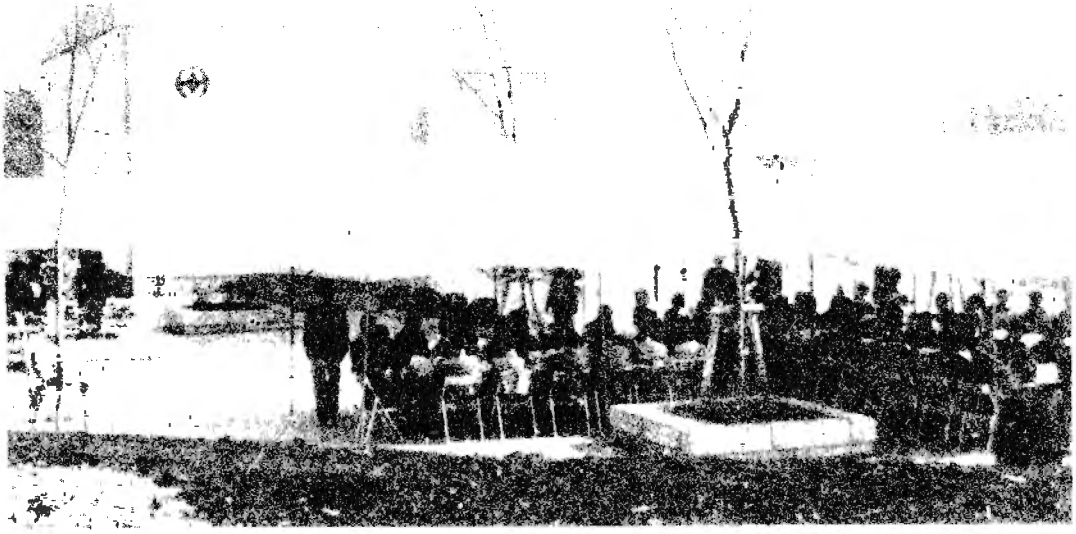
昭和41年11月24日、澄みきった晩秋の晴天下、新装なったばかりの千葉市加曽利貝塚博物館において、開館被露の式がつつましく挙行された。

思えば、昭和37年8月、宅地造成の寸前に武田宗久氏によって北貝塚の一角が発掘され、その成果をもって学界に、加曽利貝塚の現状と保存が訴えられた。それを契機として、全国的な保存運動が展開され、北貝塚の全面買収、南貝塚の緊急調査、そして南貝塚の保存運動へと発展した。その間に、北貝塚の公園整備、陳列館・収蔵庫の建設、そして開館と、わずか4年の間に、さまざまな問題が次々と起り、衆智を集めて熱心な協議が重ねられてきた。この慌しい中に、逐次宮内三朗市長の英断によって適切な処置が講ぜられた。

その背後には、いかに大勢の人びとの献身的な御指導や御援助があったことか。その熱意や尽力に感謝を表するため、県知事をはじめ県議会、市議会などの行政関係者、文化庁などの文化財関係者、日本考古学協会などの考古学関係者、加曽利貝塚を守る会や各種報道関係者等150名を開館式に御招待し、92名の方々の御出席を賜わった。

ただ、古くから加曽利貝塚とは特に縁の深い老大家である大山柏、八幡一郎、山内清男、甲野勇などの諸先生は、それぞれ御用中や御病気中のため御来席は預けなかった。とくに大山柏先生からは、「拝復前略、去る11月20日拙父大山巌50年祭にて出京不在中御芳書に接し、為に御返辞遅れました。昨21日為帰那御芳書拝見の次第不悪。栃木県西那須野町4、大山柏」という直筆を拝領した。運よくば、親しく御面接の上、種々貴重な御話を拝聴できたのにと、それが惜しまれてならない。

この加曽利貝塚博物館は、まさに文化財保護の前衛であり、遺跡の保存と活用の今後のあるべき方向を示す金字塔として、その存在の意義は大きく、その責務は重い。とくに、縄文貝塚のメッカである東京湾沿岸の中心にあり、日本最大を誇る原始集落である。貝塚を伴う集落の研究のメッカとして、今後の調査研究を期する者が多い。その期待にそうよう一層の努力を約すると共に、関係各位の更なる御指導・御援助を希って止まない。



加曽利貝塚博物館の開館式